

病変範囲を考慮した潰瘍性大腸炎における便中バイオマーカーの特性についての検討

根本展希¹⁾ 櫻庭彰人²⁾ 三浦みき²⁾ 齋藤大祐²⁾
林田真理²⁾ 米山正芳³⁾ 大西宏明⁴⁾ 森秀明²⁾
久松理一²⁾

1) 杏林大学医学部5年

2) 杏林大学医学部消化器内科学教室

3) 杏林大学医学部附属病院臨床検査部

4) 杏林大学医学部臨床検査医学教室

【目的】

便中バイオマーカーは潰瘍性大腸炎（UC）の活動性の評価に有用とされるが、その特性についてはまだ不明な点が多い。便中バイオマーカーは腸管の炎症を反映するため、病変範囲が影響を与えると推測される。我々は内視鏡的活動性の指標である Mayo endoscopic score（MES）と、盲腸および上行結腸、横行結腸、下行結腸、S状結腸、直腸の5つの部位のMESの総和であるSUM-MESを用い、病変範囲を考慮した便中バイオマーカーの特性を検討した。

【方法】

当院で2017年2月から2018年3月にHemoTecht NS-Prime（アルフレッサファーマ社）を用い同一検体で便中便中カルプロテクチン定量（Cp）、便中ラクトフェリン定量（Lf）、ヘモグロビン定量（Hb）を同時測定したUC患者187例を対象とした。病変範囲を直腸炎型（P）、左側大腸炎型（L）、全大腸炎型（T）、全病型（A）にわけHb、Cal、LfとLI及びMESとS-MESの相関を検討した。

【結果】

便中バイオマーカーとMESにおけるP、L、T、Aとの相関係数は、Cpで0.10、0.58、0.71、0.61、Lfで0.11、0.60、0.68、0.61、Hbで0.34、0.77、0.54、0.61であった。病変範囲が結果に影響を与えていることが考えられたため、全大

腸炎型と全病型を対象にS-MESとの相関を検討したところCpで0.73、0.65、Lfで0.72、0.67、Hbで0.57、0.63とわずかながらMESと比較して高い相関が得られた。

【考察】

Cp、Lf、HbとMESは全病型では同等に強い相関がみられた。しかし病型別にみると特にCp、Lfは直腸炎型では相関が弱く、左側大腸炎型、全大腸炎型の順に強くなっており病変範囲が強く影響していると推測された。実診療で内視鏡のサロゲートマーカーとして便中バイオマーカーを用いる場合、病型を考慮して用いることが重要であると考えられた。

【おわりに】

本稿は、第105回日本消化器病学会総会一般口演セッションにて発表した内容をまとめたものである。セッション中の質疑応答では病理学的スコアと便中バイオマーカーとの相関についてのご質問を頂いた。本研究では病理学的所見との相関については解析を行っていない。内視鏡的寛解を超えた病理学的寛解を便中バイオマーカーにて推測できるかどうかは今後の重要な検討課題である。日頃より直接指導して頂いている櫻庭先生、久松教授、また本研究に関わって頂いている先生方にこの場をお借りして心からご御礼を申し上げます。